

昭和の南海地震体験談

氏 名:八木 邦夫(やぎ くにお)

生年月日:昭和3年

地震を体験した場所:海南市冷水・自宅2階寝室

当時の家族状況:祖父、祖母、母、弟、妹



1) 地震発生時の状況

当時18歳で、自宅2階の寝室で就寝中だった。ユツサユツサと大きな横揺れで目が覚めた。「もう終わるかな」と思うぐらい長い時間揺れていた。揺れが収まるまで布団の中でそのまま横になっていた。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まったのですぐに起き上がり、家族に「気をつけよ」と声を掛け、自宅前の道路に出て行くと、「おっきな地震やったなあ」と近所の人達も家から出てきていた。夜明け前のまだ暗い時間だったが、風ひとつ無い静かな朝で、10～15分程度、経験した中で一番大きい地震だ等と皆で話をし、それぞれ家に帰った。もう一度寝ようと布団に入ったが眠れずにいると、下の浜の方から「津波や！津波や！」と言う声が聞こえてきたので、すぐ起きた。津波という言葉は聞いて知っていたが、見たことはないものなので、外に出て下の浜の方へ降りて行った。ちょうど潮が引いたところだった。再び自宅まで戻り、近所の人と自宅より10m西方向の見晴らしの良い場所に行った。海を見ると沖の方でピカピカ光っており、海鳴りというのか、聞いたことのない音がしてきた。同時に真っ黒の波が被さるようにこちらに迫って来ているのが見えた。高台にいたが、恐ろしくて身のすくむ思いがした。誰も声を出せないまま、第1波が到達した。第1波が引く時には港に繋いでいた船のロープが切れ、沖まで流れて行った。一旦自宅に戻ると、祖母から母屋は土地が低い所にあるので様子を見てくると頼まれ、親戚の母屋の手伝いをする為に、長靴を履いて向かったが、途中、八幡神社の下まで行ったところで、第2波が来ていて、低い道路から潮が出てきているのが見えた。危険だから、と大人に止められた。とても通れる様子ではなかった。その時、諏訪の崎が見える埠頭まで行ったら、灯台の下の底が見えた。引き潮が海水を持っていってしまい、水深7～10mの砂浜になっている海底が真っ黒く見えていた。



3) 家族の行動・被害

自宅が新しく頑丈で、高台の土地にあった為、浸水の被害は無かった。地震では棚の上の物が倒れる程度で、床に落ちたり、タンスが倒れるということは無かった。家族全員が無事だった。

4) 集落・周囲の被害

地形の関係なのか、津波の勢いはそう強くなく、急に水かさが増えていくような感じだった。海の近くの家屋はほとんど浸水し、仏壇の中を魚が泳いでいた、という話を聞いた。停泊中の船が民家にぶつかったとも聞いたが、不明者などの人的被害は無かった。船を避難させる為、船上で作業をしていたら引き潮に引かれ沖まで流された人も何人かいたそうだが、海が落ち着いてから無事に戻って来た。地震により倒壊した家屋は無かった。

5) 地震・津波後の生活

自宅に被害が無かった為、被災した親戚や知り合いの片付けを手伝った。水や食料、生活する場所等を分け合い、お互いに助け合った。公的な援助は無かったが、特別な事ではなく、普通の事として受けとめていた。自身の生活に変化は無かった。地震の前日はとても良い天気で、12月にしては珍しい日中で、夜もなんとも言えない程の静けさだった。

6) 次の災害への備え

防災訓練や避難訓練に積極的に参加し、いざという時に行動できるように心がけている。地区の防災倉庫の装備を充実させ、他の人も扱えるよう操作方法の伝達をしている。家族で避難場所について話をしている。特に持ち出し袋は作っていないが、必要な物はひとまとめにしている。